



URL <http://e-jousenji.com/>

浄泉寺寺報

発行日 平成25年1月10日
 発行者 浄泉寺住職 赤羽根 證信
 住 所 大崎市岩出山字浦小路113
 電 話 0229-72-1168

忘れまい あの日……

浄泉寺住職 赤羽根 證 信

あけましておめでとうございます。常日頃浄泉寺並びに成願寺の運営にご協力を賜り心より厚く御礼申し上げます。

私達真宗門徒にとって宗祖親鸞聖人の750回ご遠忌を厳修することは50年に一度、申せば生涯に一度のご縁であります。そのため様々な事業計画を練り重ね、準備して迎えた平成23年。いよいよの時3月11日の大震災に見舞われました。如何になすべきかを宗門は自問して3月の法要予定を変更、被災者追悼法要の名のもと自然からのメッセージを逆縁として「尊いいのちの絆」を確かめ合う場といたしました。私達も団参は中止となりましたが是非にという数人と共に4月からのご遠忌法要に詣らせていただきました。

また、11月には本廟報恩講にも14名で参詣いたしました。その折

には「被災された方々に」と前列の席を用意していただき、御同朋御同行と互いに励まし合う人々に感謝の念でいっぱいでした。

あれから1年10ヶ月、復興には程遠い現実の中で「今こそ願生浄土」の思いで居ります。

昨年は「いつの日にか音楽法要を」との思いから、4月1日、本山で行われた音楽法要に参詣いたしました。いつものお経による法要とは違い200人を超す合唱による宗祖の誕生会音楽法要に、新しい感動をおぼえたことでした。

また、6月の護寺会総会の席で「上山研修奉仕」の呼びかけをしたところ、「10月に実施」という運びになり8名の参加者で実施いたしました(詳細別紙)。上山研修奉仕は、宗祖700回ご遠忌の記念事業として興されたもので、本山の同朋会館に泊まり真宗の教えを学

び合う場です。その機会に帰敬式を受けることもできます。

帰敬式とは、一般に「おかみそり」という名前で親しまれてきた儀式で、「お釈迦様の弟子になる、仏弟子になる」という儀式です。この時に法名(戒名ではない)をいただくのですが、法名は亡くなった時にいただくのではなく、生きていく今だからこそ「人間としての生き方、あり方を真実の教えに問い学んで行こう」という出発の際にいただくものなのです。帰敬式には髪をおろすことを形どつた「剃刀の儀」があります。髪をおろすというところに私達の欲望に執われた生活を離れるという意味があり、仏法を抛り所として確かな生を生きる者となる、人生の方向転換が剃刀の儀なのです。私達の環境は順風とは申せませんが、この度の大震災で得た失うものばかりではないという体験を通して、より心豊かな人生を歩まれんことを念じて新年のあいさつといたします。

合 掌

越後の親鸞 III

責任役員 赤間 栄夫

▼恵信尼との結婚

都人で貴族の出身であり遠流という死罪に次ぐ重い刑罰により越後へ流された親鸞にとって、その土地の豪族の娘であった恵信尼との出会いは、単なる出会いという域を超えた大きな意味を有していたと思われます。恵信尼と結婚することにより、厳しい越後での生活手段が確保されたということであり、実に大きな意義があることと言っても過言ではありません。

一方、恵信尼にとつては都人であり教養も高い知識人である親鸞は大いなる憧れだったのではなかったかと思えます。それはあたかも、伊豆に流罪になった源頼朝が土地の豪族の娘である北条政子と結婚し、その北条氏の庇護によつて着々と力をたくわえ、ついには挙兵をして天下を取ったことにも比べられるのではないのでしょうか。

このような親鸞と恵信尼との結婚の意義は、二人にとつて互いに自らの生活を安定化し、確保するために極めて重要な事件であったことでしょう。二人の間には六人の子供が生まれ、越後で流罪生活を送つておりました。その親鸞に赦免の報が伝えられましたのは、流罪から四年目の建暦元年で西暦1211年の11月でした。師の法然も同時に赦免され帰洛して、東山大谷に住したのですが、翌年80歳で没しています。

親鸞も本来ならば、流罪を許されたなら直ちに京へ帰るべき身でしたが、しばらく越後に滞在した後、建保2年の西暦1214年より42歳・恵信尼33歳の頃、京の都に向かわず、逆方向の東国・関東に向かいました。

▼越後より関東へ

親鸞がなぜ京に帰らないで関東へ赴いたのかについては様々な説があります。親鸞が最も崇拜、尊敬した法然が帰洛の翌年に逝去したことも親鸞に帰洛の志を失わせたのではなかったか、しかし、なぜ関東へ向かったのかということについては、それだけでは明らかになりません。このことについては、恵信尼の実家三善家の飛び地常陸（茨城県）に存在したのではないかという説もあります。当時は源頼朝が鎌倉幕府を開いて新しい日本の政治の中心地となつたばかりで、まだ当時の日本にあつてはフロンティアであつた東国に念仏の伝道を期したのではないかと考えられます。

親鸞にとつて越後に流罪になつたことは、人生観が一変する程の体験だったに違いありません。北国の厳しい自然と、その自然の中で大地を這うように生きている民衆の姿を見るにつけ、彼にとつては絶対他力の念仏の教えの意味はますます深いものとなつていったことでしょう。したがつて繊細か

つ教養深い都人たちの住む京都はもはやそれ程の魅力ある地ではなくなつていたのかもしれませんが。

▼親鸞夫妻・子連れの旅立ち

新しいフロンティアであつた当時の東国の地こそ親鸞自身の生活すべき土地と思われたのでしよう。そのような思いから、親鸞夫妻は子供を連れて関東の地へ赴いたのではないのでしょうか。

おそらく、彼らは国府より南へ向かつて信濃へ入り千曲川沿いに進んで、碓氷峠を越えて関東の地へ入つたのではないかと思います。信州の善光寺（現長野市）は日本でも最も古い寺院の一つで、一光三尊仏の阿弥陀如来を本尊として祀り、古来全国の崇敬を集めて今日に至つております。この善光寺に親鸞親子一行が参拝逗留したという伝説が現在も残つております。

善光寺の山門の脇の常照坊という宿坊がありますが、ここに親鸞が100日間滞在したことが伝えられています。

（「親鸞の教えに学ぶ」より）

正信偈の集いに思うこと(投稿)

仙台組門徒会員 庄 司 寿 夫

毎月10日に行なわれています、今年最後の「正信偈の集い」に家内と二人で参加しました。朝、起きて見ると、雪が20cm位の積雪でびっくりしました。本堂に入ると、何時ものメンバーが十数名集まっています。



先ず最初に参加者一同で「真宗宗歌」を合唱しました。澄みきった本堂に響く歌声で心が洗われる気持ちになりました。その後で「正信偈」を唱えました。心底から念仏を唱えることは、毎回、健康的だと思っています。自分は未だに念仏を唱える時に、「勤行集」を手元から離すことが出来ないのは恥ずかしいです。

念仏の後には、ご住職のお話です。次の内容でした。

今朝起きて見ると、雪にびっくりして、朝4時頃から参道の雪掃きをしました。皆さんも雪の多いのにびっくりしたと思います。そして、「今日は雪が多いので、コタツ運転をしていた方が良い。」と迷われたと思います。それでも仏様が皆さんの背中を押してくれたのではないのでしょうか。「お寺は建物が立派であるとか。美しい環境に置かれ

ているとか。ではなく、お寺に集まって来る人と人との出会いではないでしょうか。」今朝のお話は本当に心から動かされました。自分も正信偈の集いに何人集まろうとも、集まる人の心だと思っています。

お話の中で、もう一つ感じたことは、「親鸞は教行信証を60歳頃から90歳頃の生涯まで執筆し、その長寿を支えたのは、日頃の節制と気力です。」という内容です。親鸞生誕750回縁忌を過ぎた今も、門徒の皆さんにも生き方の指針をいただいているのではないのでしょうか。

ご住職のお話では、「親鸞自筆の『教行信証(※)』は、いまなお東本願寺に保管され、国宝になっています。」と言ったことです。

毎回、お話が終ってからいただくお茶と手作りのお料理をご馳走になっていきます。ご住職ご夫妻に深く感謝申し上げます。

今朝の冷たい雪がご住職ご夫妻の温かさで一度に溶かされた様な気がします。

終わりに、門徒の皆さんも寒さに負けずに正信偈の集いに参加されてはどうでしょうか。

【※注】「教行信証」は「顕浄土真実教行証文類(けんじょうどうしんじつきようぎようしようもんるい)」の略。鎌倉時代初期の日本の僧・親鸞の著作です。浄土真宗の教義の根本を述べた書です。教・行・信・証・真仏土・化身土の6巻からなっています。毎回皆さんで唱えています「正信偈」は行巻の終わりの部分なそうです。

年回表(平成二十五年)

一周忌	平成二十四年
三回忌	平成二十三年
七回忌	平成十九年
十三回忌	平成十三年
十七回忌	平成九年
二十三回忌	平成三年
二十七回忌	昭和六十二年
三十三回忌	昭和五十六年
三十七回忌	昭和五十二年
五十回忌	昭和三十九年
百回忌	大正四年

平成24年報恩講実施報告

浄泉寺報恩講は、毎年11月23日（祝日）に実施しており、今年も盛大に行なわれました。

開式の前に副住職奥様のピアノ伴奏で「真宗宗歌」を合唱し午前9時30分、副住職の調声による「みんなでお勤め」に始まり、赤間責任役員の挨拶に続き、午前10時に「満座勤行」が組内多数のご住職が参集され、盛大に執り行われました。

続いて午前11時、昨年に引き続き福島県会津坂下光照寺住職和田至紘師によるご法話「白い闇」をいただき、琵琶の演奏を交えての師のご法話に、門徒の皆さんは真剣に聴講しておりました。

最後に参詣者全員で「恩徳讃」を合唱し、その後、担当地区の皆さんが用意されたお斎をいただき散会いたしました。

準備のためのおみがきと当日のお手伝い、そして参詣者の皆様に深く感謝申し上げます。

別院報恩講参詣と湯の浜温泉の旅

10月16日「東北別院報恩講参詣と湯の浜温泉の旅」が、浄泉寺成願寺17名の参加のもとに行なわれました。

午前7時30分浄泉寺を出発。古川の成願寺門徒と合流し東北別院に向かい、9時には別院に到着し開式を待ちました。

当日の別院の行事は「2日目日中」。震災の影響で参詣者が少なかった昨年よりは人数が増えてはいたものの、本堂を埋め尽くす程の例年の参詣者はなく「震災の影響はまだまだ消えてはいないのだな」と感じられました。

その様な中で式は進められ、「正信偈草四句目下」「和讃」等を参加者全員で唱和し、続いて石川県光闡坊住職佐野明弘師による講話「念仏者たれともに念仏者たらん」を聴講させていただきました。

また、別院では先の東日本大震災の被害者救援のためのチャリティバザーを開催中で、それに協

力されている参詣者の姿が数多く見られました。

参詣後は近くのホテルで昼食をとり湯の浜温泉に向け出発。湯の浜温泉への道中は天気にも恵まれ、午後4時過ぎには湯の浜温泉「竹屋ホテル」に到着。一行の労をねぎらい懇親会が行なわれ、歌や踊りと楽しいひと時を過ごしお互いの懇親を深めました。

2日目の17日。8時30分に宿を出発し、先ず、鶴岡市羽黒町の庄内映画村を見学し酒田市山居倉庫で昼食の後十六羅漢岩に立ち寄り鳥海山に向かいました。鳥海山に上り始めた時点では「紅葉を見るにはまだ早いのではないか」と皆が思っておりあまり期待はしていませんでしたが、中腹に差し掛かると少しずつ紅葉が見られ、頂上付近の駐車場は、いまや真つ盛りという光景で、車内からは大歓声が上がる程の紅葉を観ることができました。

絶景への感動を胸に刻み、一行は帰路につきました。

あ

と

が

き

「福は内、鬼は外」2月上旬節分の声、寒い冬から春を迎え心待ちにしている行事である。

「鬼」自分に都合の悪い難は私の外へ、「福」思い通りになることは私のもの。思えばこんなご都合主義は如何なものだろう。

国民年金制度がスタートしたのが昭和37年頃。所得倍増計画という名のもと「家に居る子供と年寄りには国で面倒見ますので外で働いて暮らしを豊かにしましょう」と政府やお役人の言。しかし本音は「収入が増えれば子供が増える。年寄りは75歳までには殆ど死ぬだろう」と考えて……。掛金は使つて減らない、正に打出の小槌に見えたのだろう。

しかしドッコイ!!鬼は居座り福はやって来ない。所詮人間が考えたご都合主義の産物である。

為政者自身が「福が内なら鬼も内」いや「鬼は内、福は外」ならどうですか? (寺報編集委員)